

# 豊後高田市の文化財

県指定文化財



豊後高田市教育委員会

## 第3節 県指定文化財

### 銅鏡

■有形 ■指定日：昭和28年4月20日 ■所在地：草地 ■年代：後漢中期

銅鏡は神人車馬龍虎画像鏡で、江戸時代末期に鑑堂古墳から出土したと伝えられる。鏡は白銅質の直径 20cm で、鏡背の文様は鈕をめぐって珠文圏があり、内区は円座乳をもつて4分されその間に2神、2獣、1馬車が配されている。また内区に接した銘帯には、「劉氏作意四夷服多賀国家人民胡虜珍滅天下復風雨時節五穀執長保二親得天力大吉利分」と39字の銘文が陽刻されている。



### 石造宝塔（国東塔）

■有形 ■指定日：昭和32年3月26日 ■所在地：田染平野 ■年代：南北朝時代

総高は 310cm。一般には熊野墓地国東塔と呼んでいる。笠と基礎とが大破していたが散逸部分を補足復原した。なお基礎初重は昔使用していたものを用いて修復した。石材は溶結凝灰岩が用いられている。特に塔身全面に薬研彫りされた銘文は見事である。銘文中に「応安八天乙卯(1375)」とあり、また良秀以下の願主20名以上が並ぶ。逆修祈願を行った事も分かる。



## 石造宝塔（国東塔）

■有形 ■指定日：昭和32年3月26日 ■所在地：田染平野 ■年代：南北朝時代

総高 234cm。基礎は3重で第3重の4面はそれぞれに分かれ、格狭間が刻まれている。台座は反花と蓮花座とからなり、反花は複弁の8弁蓮花座は単弁の8弁と間弁とからできている。塔身は茶壺形の代表的なもので格好が良い。西面にただ1行「永和乙卯（1375）四月日」と刻まれている。笠は照屋根で、相輪は露霊と請花の下半分を残して上部を欠損している。石材は溶結凝灰岩。周囲には五輪塔が多数散在している。



## 画像石

■有形 ■指定日：昭和33年3月25日 ■所在地：美和 ■年代：南北朝時代など

もとは丘陵崖下に並べていたが、現在は収蔵庫に安置。安山岩質の剥離石94枚に、浄土思想を主題とした図像を線彫りにしている。紀年銘を刻すものが何点かある。六地藏図（至徳2年-1385）、弥勒来迎図（明德2年-1391）、願文石（明德4年-1393）などである。完成まで約10年を費やしたことになる。その他構図のすぐれたものとして、閻魔の庁地獄変相図を描いたものなどがある。このように多数の板石に像を線刻した例は他にはなく、きわめて珍しい。



## 梅遊寺板碑

■有形 ■指定日：昭和34年3月20日 ■所在地：一畑 ■年代：室町時代前期

総高 138cm、横幅 68cm、碑身厚さ 19cm。梅遊寺の本堂前庭に他の板碑と並立している。十三の種子を刻む十三仏板碑である。十三仏信仰は南北朝末期頃から流行する民間信仰であるが、当板碑は年記銘から「応永十一歳 (1414)」「十一月四日」に作られた事が分かり、県内最古のものとして貴重である。上段 4、中段 4、下段 5、合わせて 13 の種字が大きく薬研彫りされている。下部には柄があり、別石の基礎の上に挿入して立っている。



## 木造阿弥陀如来坐像及脇侍

■有形 ■指定日：昭和34年3月20日 ■所在地：田染蒨 ■年代：平安時代後期

像高は中尊 87.5cm、観音 103.1cm、勢至 102.5cm。富貴寺本堂兼庫裡に安置される阿弥陀三尊像である。当初から一具のものとして造立されたもので、いずれも檜材の寄木造、彫眼の漆箔像である。螺髪は小粒で、面相も九顔も穏やかである。体軀の肉取りも適宜で浅彫りの衣文も破綻がない。平安時代末期の和様化した仏像彫刻の定型を示しており、大堂本尊の阿弥陀如来坐像と同時期の 12 世紀後半の造立であろう。中尊の蓮台天板裏には宝暦 2 年 (1752) の修理銘がある。



## 富貴寺笠塔婆

■有形 ■指定日：昭和40年3月9日 ■所在地：田染落 ■年代：鎌倉時代中期

総高は、石段側に立つ第1号は170cm、大堂西側に並んで立つ4つの笠塔婆については、写真の左から第2号230cm、第3号178cm、第4号115cm、第5号125cmである。石材はいずれも安山岩。第1号は完形で、細長い梯形自然石の前面を削平した塔身の上に露盤のついた笠、その上に請花宝珠を置いたもので、形が整っている。

刻銘によるといずれも僧広増が往生極楽を祈願して、仁治2年(1241)から文永5年(1268)にかけて造立したものである。



## 木造聖観音立像

■有形 ■指定日：昭和44年3月22日 ■所在地：小田原 ■年代：平安時代中期

像高は193cm。現在は小田原内野の観音堂に安置にあり、「内野聖観音立像」とよばれている。榿材を用いた一木造、彫眼、現状素地。両腕肩から先、両足先を欠失。内割りを全く施こさない完全な一木彫成像であるが、顔面から胸腹部、下半身前面にかけて焼痕があり、朽損著しいのが惜まれる。高く大ぶりの髷や厚く張りのある腰部の肉取り、両側面裾部のしのぎの立った翻波式の衣文には平安初期一木彫像の面影を伝え、国東のヴィーナスと呼ぶに相応しい。10世紀頃の地方作になるものであろう。本像は、江戸時代に火災に遭った、六郷満山本山本寺西叡山高山寺の旧仏と伝えられる。



## 木造釈迦如来坐像

■有形 ■指定日：昭和46年3月23日 ■所在地：長岩屋 ■年代：平安時代後期

像高 93cm。天念寺本堂に安置される。樟材一木造で、背面に内ぐりを施こし、背板を矧付ける。両手首先を失なうが、現状からみ（本来は定印の阿弥陀如来像であったかもしれない。総体に腐朽が著しいが、九顔の円満相はふくよかであり、頭髪には小粒の螺髪を整然と刻む。胸・腹の肉取りには抑揚があるが、衣文の彫りも浅く平板であり、12世紀後半頃の地方作。



## 木造日光、月光菩薩立像

■有形 ■指定日：昭和46年3月23日 ■所在地：長岩屋 ■年代：平安時代後期

像高は日光 94.5cm、月光 87.0cm。天念寺本堂の木造釈迦如来坐像の左右に立つ。写真は日光菩薩立像。欠失の為、両腕を矧ぎ付けている。月光像は頭頂髪を欠失の為、別木で矧ぎ付け、右腕は付根から欠失している。九顔の円満相で、衣文の彫りも形式的で平板であり、12世紀末の地方作。



## 木造勢至菩薩立像

■有形 ■指定日：昭和45年3月23日 ■所在地：長岩屋 ■年代：平安時代後期

像高 96.5cm。天念寺本堂に安置される。樟材の一木造。内ぐりなし。両肘から先を、別木矧付け（欠失）とする。材質からみて、あるいは天念寺本尊釈迦如来坐像の脇侍のうちの一方であるのかも知れない。伏し目がちに小づくりの日鼻立ちは愛らしく、量感のある下半身には浅彫りではあるが的確な衣文さばきがみとめられる。釈迦如来坐像と同時期の12世紀後半頃の地方作であろう。



## 木造吉祥天立像

■有形 ■指定日：昭和45年3月23日 ■所在地：長岩屋 ■年代：平安時代後期

像高 107.0cm。天念寺本堂にある。榿材の一木造。内ぐりなし。両手首足先の矧木を欠失。髪は頭上で小ぶりの鬘を結び、垂髪は背後で一本に束ねられる。やや面長の面相は両頬に張りをもたせ、ふくよかである。直立する体軀には裳の上から二重の上衣を着す。衣文は浅彫りで簡略であり、本尊釈迦如来坐像と同じく12世紀後半頃の造立であろう。



## 木造仮面

■有形 ■指定日：昭和46年3月23日 ■所在地：田染落 ■年代：平安時代後期

富貴寺の須弥壇から発見された三つの面。左の菩薩面は、縦に櫃の三材によって彫成したもので、左目尻から左耳にかけての左側面一材を欠失。彩色も目上の下地を僅かに残すのみで殆ど剥落している。目鼻立ちには鎬の立った鋭い彫りを見せ、頬の膨らみも豊かであり、中央の影響を受けた平安時代12世紀後半の制作と見られる。面長27cm。



追儼男女面は、桐材を用い、目上の下地に彩色が残る。眉間に皺を寄せた右の男面は峻厳さを表し(21.7cm)、女面は柔和な相貌を持つ(20.5cm)。裏面に久安3年(1147)・御修正会の墨書銘がある。

## 其ノ田板碑

■有形 ■指定日：昭和47年3月21日 ■所在地：田染落 ■年代：南北朝時代

富貴寺から少し西に進んだ川沿いに立つ。周りには五輪塔が多く立っている。

向って左の板碑は総高195cm、碑身の幅は46cm。額部と碑身中央に種字を薬研彫りする。下部には「建武元年(1334)八月廿四日」の刻銘がある。

向って右の板碑は総高170cm、碑身の幅は54cm。碑身の中央に種字を薬研彫りしている。2基ともに同型で、銘の内容から南北朝時代の時衆による造立と推測される。



## 富貴寺板碑

■有形 ■指定日：昭和47年3月21日 ■所在地：田染落 ■年代：南北朝時代後期

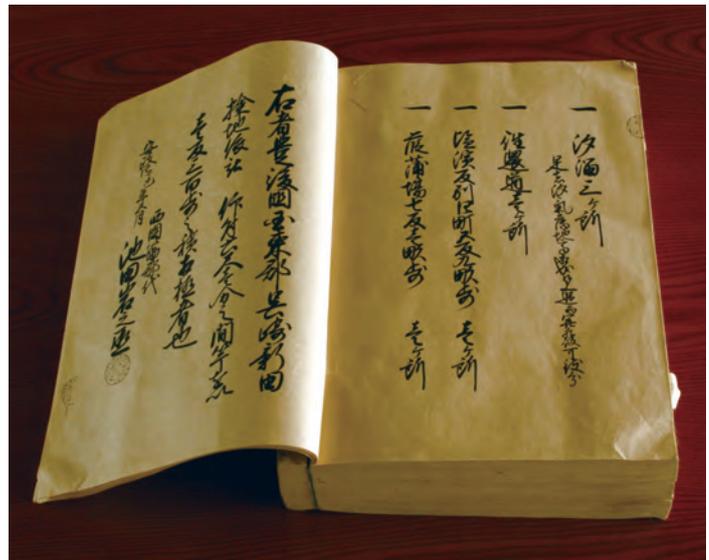
総高 134cm、碑身の幅 46cm、厚さ 12cm。石材は角閃安山岩。額部は碑身より約 4cm 前出している。富貴寺参道登口左手に立っている。碑身の上部に大きく種字が薬研彫りされ、その下に「延文六年（1361）七月廿五日敬白」「右志者為祐禅大徳」「七季忌造立如件」の銘があり、室町時代の学頭祐禅の七回忌に造立された事が分かる。祐禅の名は大堂棟木にも見られる。



## 呉崎新田検地帳、附新田関係地図

■有形 ■指定日：昭和48年3月20日 ■所在地：呉崎 ■年代：江戸時代後期

幕末から明治初年の国東郡呉崎新田の検地帳と絵図。呉崎新田は文政 2 年（1819）から同 11 年にかけて日田代官塩谷大四郎が現豊後高田市の海岸部の遠浅地帯を埋め立てによって開いた。検地帳は天保 4 年（1833）の塩谷大四郎、弘化 3 年（1846）の竹尾満右衛門、嘉永 2 年（1849）の池田岩之丞、明治 2 年の日田県段階の検地帳で、一つの新田の変遷が追える貴重なものである。検地帳 11 冊と明治 10 年絵図からなる



## 庵ノ迫板碑

■有形 ■指定日：昭和50年3月28日 ■所在地：梅木 ■年代：南北朝時代後期

地上の総高 140cm、幅 59cm。大字梅の木の雑木林の中に立つ。一石に二基の板碑を刻んだ二連碑で、所在地名を冠して庵ノ迫板碑と呼ばれる。両面とも額部に種子を墨書、碑身にも大きな種子を墨書している。その下部にも多くの墨書銘があるが、多くは判読できず「文中三年(1374)五月十五日」の文字がかろうじて読み取れる。



## 梅遊寺板碑

■有形 ■指定日：昭和50年3月28日 ■所在地：一畑 ■年代：南北朝時代前期

総高 146cm、横幅が下部で 52.5cm、上部で 43.5cm。写真では左の板碑である。

石材は角閃安山岩。本堂前庭の十三仏板碑と共に並立している。1基は碑身の上部に種子を大きく薬研彫りし、下部中央に小さく「建武三年(1336)二月十…」とある。



## 延寿寺石殿

■有形 ■指定日：昭和51年3月30日 ■所在地：田染小崎 ■年代：戦国時代前期

総高は 131cm。石材は凝灰岩。延寿寺境内にある。基礎と軸部の間に中台が設けられている。基礎は一石の二重。中台の下部は蓮華座状。屋根は入母屋造。軸部の正面と裏面は六地藏を、向かって右面には虚空蔵菩薩 1 軀、左面には観音と思われる 2 軀が陽刻されている。なお虚空蔵菩薩の面の縁には「峇応仁弍歳丁亥八月彼岸日大願主宇佐栄忠謹言之」と陰刻されている。



## 胎藏寺懸仏

■有形 ■指定日：昭和51年3月30日 ■所在地：田染平野 ■年代：鎌倉～室町時代

鎌倉時代から室町時代にかけての作。胎藏寺の背後の山腹にある熊野権現社の御正体であったものを、明治初年に胎藏寺に移したという。如意輪観音を鋳止めにする 1 面は鎌倉時代の作である。阿弥陀三尊を鋳付けた 1 面には「六郷本山今熊野御正体也」と建武 4 年 (1337) の年記銘と勸進僧・筆者の僧および結衆の名前を彫る。径 53.5cm の大きさに比べて、やや小ぶりの獅磯座を付ける。六郷満山関係遺品としても貴重である。残る 1 面は室町時代の作。



## 富貴寺石殿

■有形 ■指定日：昭和59年3月30日 ■所在地：田染落 ■年代：室町時代

富貴寺参道登口にある2基1対の十王石殿。一石で刻んだ二重の基礎の上に直方体の軸部を置き、入母屋造の屋根をのせる。軸部正面3軀、参道側面に2軀の十王を半肉彫する。更に西側石殿側面の十王像の間には人頭幢を、東側石殿側面の十王像の間には浄玻璃鏡を彫り出してある。



## 若宮八幡神社石造橋

■有形 ■指定日：昭和58年4月12日 ■所在地：玉津 ■年代：江戸時代後期

若宮八幡神社の参道上に存在する。1連アーチ、長さ3m、幅員4.07m、径間3.08m、環高3.4m、曲率半径1.54m、輪石16個、要石1個、反橋勾欄築、板石厚12cm、曲率半径1.90m、アーチ橋上部7石にその湾曲部を重ね合せてある。15～20個石で基になる扶橋を組み、その両小口に化粧仕上げした輪石で縁どりの共橋を組み添えて、神橋にふさわしい丁寧な仕上げである。橋柱に「万延元年(1860)」「大野寿右エ門(市域で広く活動する石工)」の銘がある。



## 智恩寺国東塔

■有形 ■指定日：昭和53年3月31日 ■所在地：鼎 ■年代：南北朝時代

総高 300cm 余。石材は角閃安山岩。基礎は 3 重で、第 3 重の 4 面はそれぞれ 2 区に分ち格狭間を刻む。台座は反花と蓮花座とからできているが、基礎第 3 重と反花とは 1 石である。塔身の奉納孔は普通首部の付根あたりに穿たれているが、これは塔身上部に丸くあけてある。笠は照屋根、軒先は両端で反っている。台座や相輪の請花の蓮弁の形は、国東半島所在のものとしては珍しい。総高 30m 余。



## 長安寺国東塔

■有形 ■指定日：昭和54年5月15日 ■所在地：加礼川 ■年代：鎌倉時代後期

総高 346cm。長安寺本堂横の石段を登ると左折して間もなく身濯神社前に達するが、参道右側の森の中に立っている。基礎は 3 重。第 3 重の 4 面はそれぞれ 2 区に分ち格好のよい格狭間が刻まれている。台座は複弁で間弁も共に八葉の反花のみで優雅である。塔身は下部がやや細まって形がよい。笠は照屋根で軒反りは流麗、露盤は笠とは別石で造られている。相輪は請花の蓮花座から上は後補。



## 城山国東塔

■有形 ■指定日：昭和54年5月15日 ■所在地：田染真木 ■年代：南北朝時代

総高 303cm。城山の四方仏石に接して国東塔が立っている。不整八角形の基壇の上に置かれた方形の基礎は、4面をそれぞれ2区に分け、変形の格狭間を刻んである。台座の反花は複弁の十二葉、蓮花座は単弁の十二葉で蓮弁は共に形の変ったものである。塔身は下部がやや細まった円筒形で、笠は形の整った照屋根。相輪は1石からなり露盤は厚い。相輪の損傷の外は完形。石材は角閃安山岩。南北朝時代から室町時代初期の造立と推定される。



## 塔ノ御堂板碑

■有形 ■指定日：昭和54年5月15日 ■所在地：小田原 ■年代：鎌倉時代後期

総高 180cm。塔ノ御堂地蔵堂の境内にある。額部には種子バン（金剛界大日）が線彫りの月輪の中に刻まれている。碑身上部には大きくキリーク（弥陀）、その下に2字並ベキリーク（観音）、サク（勢至）と薬研彫りされている。筆勢は実に雄渾である。根部の正面には縦線の入った単弁の蓮弁を請花反花式に刻んである。板碑としては県内では他に例のない丁重な技法である。造立年代は鎌倉時代末期と推定。石材は角閃安山岩。



## 福寿寺薬師堂磨崖国東塔

■有形 ■指定日：昭和55年4月8日 ■所在地：田染平野 ■年代：室町時代

総高約 90cm。大字平野字陽平福寿寺境内に烏帽子嶽の山すそがのびている。その岩壁正面に薬師如来や地藏菩薩像などが彫られているが、岩壁の向って右側面の竈に国東塔一基が陽刻されている。基礎は二重、台座は反花と蓮花座からなる。塔身には中央に「香以」その両側に「永享」「癸丑」の陰刻 1 がある。永享癸丑は永享 5 年(1433)にあたる。



## ゆずりは両面板碑

■有形 ■指定日：昭和56年3月31日 ■所在地：梅木 ■年代：鎌倉時代後期

下部は粗雑な事礎をなし、これを加えた総高は約 161cm 余りである。高さ比べ碑身の幅は広く、上部 71cm、中央 73cm、下部 72.5cm、厚さは 15cm 余である。碑身中央上部に大きく種子キリーク（弥陀）、少し下がって両脇にカ（地藏）、イー（地藏）が刻まれている。背面は正面と同様に碑身中央上部に大きく種子が刻まれている。



## 穴瀬横穴群

■史跡 ■指定日：昭和46年3月23日 ■所在地：美和 ■年代：古墳時代後期

桂川の右岸の台地崖面に開口する装飾のある横穴古墳群である。19基の横穴のうち、10基に赤色を主とした彩色が施されている。彩色は羨門部の上部あるいは左右に、円文、同心円文として描いたものにある。羨門部のつくりは入念であり、横穴古墳としては例をみないものである。時期は6世紀後半と推定されるが、装飾のある横穴としては宇佐市の国史跡四日市横穴群、県史跡費船平横穴群との関連が注目される。西国東地方の古墳文化の特質を知る上で貴重な遺跡である。



## 入津原丸山古墳

■史跡 ■指定日：昭和49年3月19日 ■所在地：新栄 ■年代：古墳時代中期

大型の帆立貝式古墳。周防灘を臨む台端部に立地し、規模は径約71m、後円部径60m、高さ8m。造り出し部の長さ8m、幅20m、高さ2m。後円部は3段築成、造り出しは南側に付設されており、幅20m程の周濠が廻る。明治34年頃後円部の中心から箱式石棺が発掘され、四獣鏡、鉄剣等が出土している。西国東地方では真玉大塚古墳に次ぐ規模をもっており、この地方の5世紀代の首長墓とみられる。



## 猫石丸山古墳

■史跡 ■指定日：昭和49年3月19日 ■所在地：草地 ■年代：古墳時代後期

国東半島南西部の丘陵端部に位置する前方後円墳。西国東地方では、真ま大塚古墳、入津原丸山古墳に次ぐ大きさである。

墳丘の規模は、全長 60m、後円部径 30m、同高さ 3 m、前方部先端幅 35m、同高さ 25m。前方部は北西部の海岸に向いており、後円部は前方部に比べて径は小さい。前方部の上面はやや削平をうけているものの周濠跡も確認されており、全体としてよくその規模を保っている。古墳時代後期のものと推定される。



## 金剛山長安寺

■史跡 ■指定日：昭和54年5月15日 ■所在地：加礼川 ■年代：平安時代～

都甲地域の中心に聳える屋山の中腹に形成された中世六郷山寺院の中核的要素をなす寺院。安貞目録では惣山とされ、鎌倉幕府の祈願所として、元寇に際する異国降伏祈禱などで活躍した。平安時代の太郎天像や銅板法華経、国東塔など多くの文化財を有する。参道付近や加礼川地域には広く長安寺の坊跡が存在し、宗教的な空間を広げている。

中世後期には、大友氏家臣の吉弘氏によって寺務が独占され、山頂に屋山城が築かれた。関連文化財・史料も多く残されている。



## 長岩屋山天念寺

■ 史跡 ■ 指定日：昭和54年5月15日 ■ 所在地：長岩屋 ■ 年代：平安時代～

長岩屋川沿いの巨岩を穿って造られ、中世には長岩屋と呼ばれた六郷山寺院の一。史料から、中山本寺の中でも大規模な法会を勤仕していた事がわかる。

典型的な横長の伽藍配置を持ち、修正鬼会が行われる講堂と身濯神社を高く配置して、一段下に本堂が置かれる。この伽藍配置は六郷山年代記の火災の記事から中世に遡ると考えられる。

中世には長岩屋地区の広い範囲で、住僧以外の居住が禁じられた空間であり、60 を超す坊が存在した。一部の坊跡からは、中世に遡る遺物も多く出土している。

現在は各坊・岩屋から集められたとされる仏像が多く本堂に収められている。



## ホーランエンヤ

■ 選無 ■ 指定日：昭和53年3月31日 ■ 所在地：玉津 ■ 年代：江戸時代

江戸時代中期に始まったと伝える元旦早朝に行われる槽船行事である。江戸時代、豊後高田は島原落領だった。当時は、島原や大坂行きの年貢米回送船の安全を年頭に祈願することを目的にしていた。ふんどし姿の若者が、宝来船に乗り込んで、桂川に漕ぎ出し、笛や太鼓に合わせて「ホーランエンヤ、エンヤサノ、サッサ」の掛声とともに、上流の若宮八幡宮に向かい、航海安全と豊漁を祈願する勇壮な祭りである。



## 草地おどり

■選無 ■指定日：昭和62年3月4日 ■所在地：草地 ■年代：江戸時代

草地おどりは、毎年8月13日～20日、初盆供養踊りとして踊られるもので、起源は享保年間（1716～1735）とするが定かではない。

踊りは、概してテンポが早くリズムカルで、現在は「レソ」「マツカセ」「ヤンソレサ」「六調子」の4種類を順次切り替えて踊る。囃子は、大鼓・味線・鐘・横笛で行う。大分県を代表する芸能の1つと言える。



## 長安寺太鼓

■有形 ■指定日：平成6年3月25日 ■所在地：加礼川 ■年代：鎌倉時代後期

非常に珍しい木製の鉾による鉾打ち太鼓。自然木を形状のまま輪切りにして内部をくりぬいた造りをしており、これも珍しい。内部には墨書「文永三年（1266）午ノ六月十一日新城村くミ十三人」以下、補修の内容も含めて五つの墨書が残されている。同様の内容が『六郷山年代記』によって確認される点が貴重である。主に報知用に利用されたと考えられている。



## 円福寺木造大応国師坐像及び胎内納入品

■有形 ■指定日：平成6年3月25日 ■所在地：玉津 ■年代：南北朝時代

像高 67.7cm。老貌、閉口。法衣、裳を着け、袈裟を纏う。倚子上で結跏趺坐し、法衣の袂・袈裟を前に垂らす。沓を沓床に置く。本体はヒノキの寄木造。

錆漆の下地に白の彩色を施す。玉眼。沓もヒノキ材であるが、倚子はケヤキ材。

昭和63年の調査によって、像頭部に納入品が確認されたが、近年の修理に伴って、胎内納入品が取り出され、鎌倉時代から室町時代にかけての経典や願文、円福寺の縁起などが確認された。これまで頂相彫刻に多種の納入品が籠められた例はなく、像や寺の歴史と関わる記述と関連する事も極めて貴重と言える。



## カワラガマ遺跡

■有形 ■指定日：平成8年3月29日 ■所在地：佐野 ■年代：奈良時代後期

九州では珍しい瓦専用の平窯。奈良・京都における神社・寺院・宮などに採用されたが、地方でも国分寺などに利用された。焼成室・燃焼室などの他に、窯内外から鎧瓦、宇瓦・男瓦・女瓦・熨斗瓦などの古瓦が出土している。近くに建っていた薬恩寺跡の瓦と出土瓦の成分・型が近く同范の瓦である可能性が高い。



## 木造不動明王坐像

■有形 ■指定日：昭和44年3月22日 ■所在地：大岩屋 ■年代：平安時代後期

像高 103.5cm。檜材を用いた一木造の彫眼像で、現状は素地を呈している。右眼を見開き左眼を伏し目にした天地眼に、二牙をあらわし、右手に利剣、左手に索をとる。体奥厚く、両膝にも張りがあるが、彫法はいたって簡略であり地方色が著しく、12世紀になってからの造立であろう。持物および台座 火焰光背は近世の後補である。台座上面に近世の宇佐宮仏師百楽右衛門の修理墨書名がある。



## 木造薬師如来坐像及び十二神将

■有形 ■指定日：昭和35年3月22日 ■所在地：中黒土 ■年代：平安時代後期～鎌倉時代

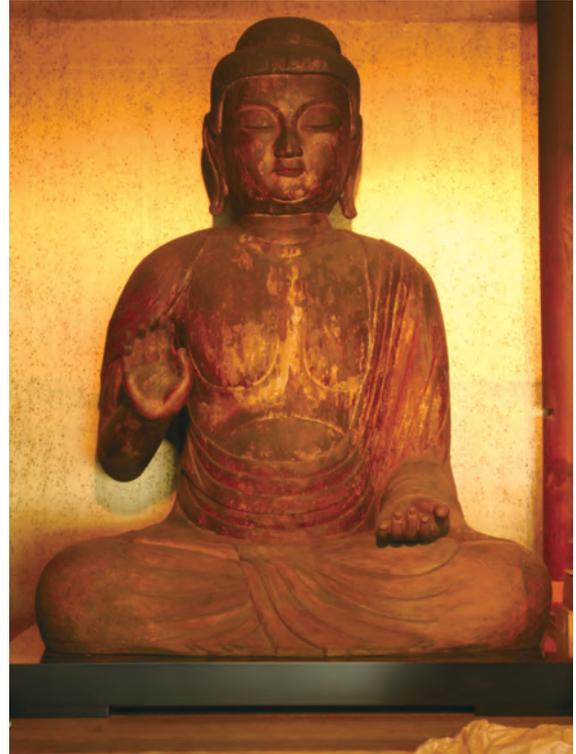
中尊の薬師如来は像高 155.0cm。樟材の一木造、彫眼の彩色像である。背面後頭部から背中、地付にかけて大きく内ぐりを施す。膝前は横二材からなる。張りのある肉髪地髪にやや大きめの螺髪を刻み、彫りの深い目鼻立ちには森厳な面もちをたたえている。胸腹部の肉取りも厚く、衣文の彫出は浅彫りではあるが翻波式の名残りを見せる。11世紀後半期の造立であろう。鎌倉時代の作と伝える十二神将像は、檜材一木造の小像であるが各々動勢に富んだ力強い造形をみせる。



## 木造薬師如来坐像

■有形 ■指定日：昭和35年3月22日 ■所在地：中黒土 ■年代：平安時代後期

像高 135cm。無動寺本堂に安置される。樟材による一木造、彫眼の彩色像である。頭部一材に背割りを施し、膝前横二材を矧ぎつける。肉筈は低く螺髪を省略する。丸顔の面相から胸・腹部の肉取りは大ぶりではあるが抑揚に欠ける。衣文の彫出も浅彫りで形式的であり、12世紀後半頃の造立であろう。寺伝では弥勒仏として伝わるが、朽損の著しい左手は与願印とみられ、ここでは従来通り薬師如来とみておきたい。



## 木造大日如来坐像

■有形 ■指定日：昭和35年3月22日 ■所在地：中黒土 ■年代：平安時代後期

像高 178.0 cm。薬師如来 2 軀と同じく無動寺旧講堂に安置されていたものである。現在は本堂にある。樟材による一木造、彫眼の彩色像である。頭上に宝冠をつけ、両手を膝上で禅定印に結び、胎藏界の大日如来を表わす。両肩は外に強く張るが、胸に厚みがない。面相や衣文の彫りも浅く典型的である。その影法には、隣の木造薬師如来坐像と酷似したものがあ、おそらく同時期、12世紀の造立であろう。



## 木造不動明王坐像

■有形 ■指定日：昭和44年3月22日 ■所在地：中黒土 ■年代：平安時代後期

像高 115.8cm。現無動寺の本尊である。檜材を用いた一木造で、頭・軀・共木に膝前横二材と両肩口で腕材を矧ぎつける。背面に内ぐりを施し、背板をはめる。彫眼の彩色像。持物 火焰光背 台座は近世の補作である。目鼻立ちや胸腹部の肉取り、両膝を蔽う衣文など浅彫りで抑揚に欠けるきらいはあるが、その童顔に近い穏やかな相貌、両肩 膝に張りをもたせた大ぶりの像容には平安後期藤原彫刻の大らかさを見せている。12 世紀中頃の造立であろう。



## 福真磨崖仏 附 堂ノ迫磨崖仏

■史跡 ■指定日：昭和35年3月22日 ■所在地：下黒土 ■年代：南北朝時代

現在の椿堂近くから福間堂へ向かう道があり、その途中に凝灰岩の壁面に浅い龕を彫り、金剛界大日如来坐像、金剛界四仏、六観音、六地藏を彫る。各像の眉目などには墨書彩色が残る。覆屋の外壁には胎藏界曼荼羅の陰刻がある。儀軌にとらわれない自由な表現が六郷山寺院の特徴と言え、南北朝時代の作とされる。唐破風付きの石造覆屋は珍しく、銘から真玉を代表する石工安藤国恒が安政に造った事が分かる。

堂ノ迫磨崖仏は、応曆寺奥の院に通じる参道の途中にあり、六観音、六地藏、比丘尼像を彫る。室町時代の作とされる。



## 真玉寺石殿

■有形 ■指定日：昭和52年3月31日 ■所在地：大村 ■年代：室町時代

真玉寺は真玉氏の菩提寺で、堀に囲まれた中にある。石殿はその門外に造立され、基壇 基礎 柱竿 中台 軸部 屋根から構成されている。基壇の両側は1区、前面と背面は2区に分かれ格狭間を刻む。基礎は2段になって反花、中台は請花の形。軸部の正面と背面は3区に分かれ六地藏を、両側面に像容不明の尊像が1軀ずつ陽刻されている。屋根は本母屋造で、懸魚や椀などを入念に造り出している。柱竿に長祿3年(1459)の刻銘がある。



## 小河内山神社宝篋印塔

■有形 ■指定日：昭和53年3月31日 ■所在地：小河内 ■年代：室町時代

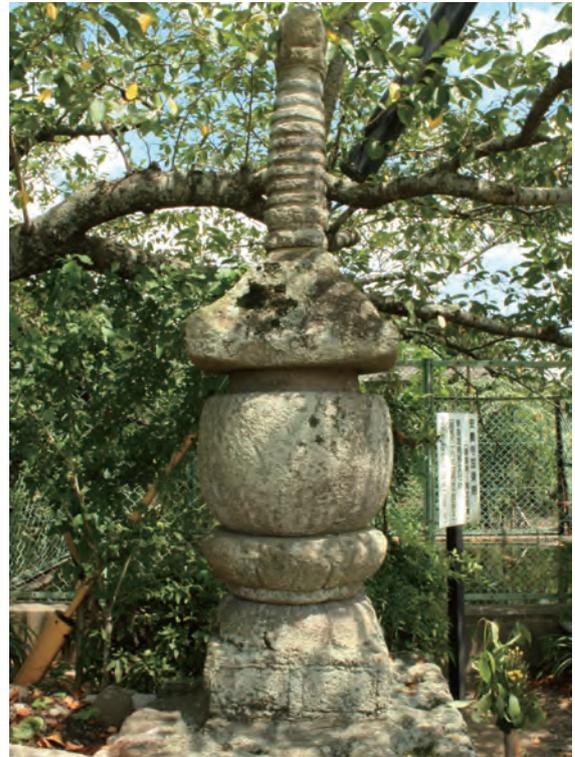
総高 160cm。大字黒土の山神社境内にある。基礎は2重で、上重の4面がそれぞれ2区に分かれ、格狭間を刻んである。上面に2段の切出があり、その上に塔身が立っている。塔身の4方には金剛界四仏の種子が彫られている。「永正十三年(1516)」、「三月十日里敬白」、「願主三郎太郎」などの銘文が読みとれる。笠の上下には数段の切り出しがあり、露盤の4面には×形が刻まれている。相輪下部の請花の平面は方形、上部の宝珠は欠失している。



## 安養寺国東塔

■有形 ■指定日：昭和58年4月12日 ■所在地：堂ノ迫 ■年代：鎌倉～南北朝時代

安養寺国東塔は、当寺の参道入日の右側に建っている。総高 198cm、石材は角閃安山岩。基礎は1重で、1面には2個ずつの格狭間がある。基礎と反花は1石で彫られ、台座は蓮花座反花ともに完備していて、また塔身は壺形である。笠は照屋根で、軒日は上にかかるく反っている。相輪の先端部は惜しくも欠損している。造立年代は明らかでないが、鎌倉時代か南北朝初期と推定される。また造立目的は祈願または供養のためと思われる。



## 雲雀丘国東塔

■有形 ■指定日：昭58年4月12日 ■所在地：近ノ下 ■年代：南北朝～室町時代

総高は 234cm。基礎は2重、第2重は4面をそれぞれ2区に分け、中に連子を穿った格狭間を刻んでいる。台座は1石で作られた反花と蓮華座で、その間には玉縁がめぐらされているが、崖に接した裏面は省略している。塔身は中ほどのふくらんだ壺形で、上部と首部にかけた位置に、内部の空洞に通じる小孔がある。笠は照屋根。四方を火焰で囲んだ宝珠の請花は蓮華座のみである。南北朝時代か室町初期の造立。



## 真玉氏居館跡

■史跡 ■指定日：昭和60年3月29日 ■所在地：大村 ■年代：室町時代

北浦辺衆として西国東地域で活躍した武士、真玉氏の居館跡。文和元年(1352)に大友氏一族の木付重実が、真玉荘の荘官を出自とする前期真玉氏を追い出して入部し、真玉氏を名乗った時に造られた居館とされる。平地ながら周囲には幅 1.2m の堀がめぐらされている。現在は内堀と、その入口外側の居館跡地「貴戸の前」が残る。相当広大な複郭式居館であった事がうかがい知れる。現在は真玉寺。



## 焼尾塔ノ本国東塔

■有形 ■指定日：平成4年3月27日 ■所在地：夷 ■年代：南北朝時代

総高 234cm。基礎二重。台座・塔身・笠・相輪がそろっており保存状態が良い。塔身首部は別石で格狭間が立派な造りをしている。笠上の板碑形の格好を刻んだ露盤が珍しい。各部に南北朝時代の特色が現われている。



## 潮観橋附潮観橋序碑石燈籠

■有形 ■指定日：昭和57年3月30日 ■所在地：香々地 ■年代：江戸時代後期

全長 10m、径間 6.4m。石造単アーチ橋で別官八幡社入口の八幡川に架けられている。橋の袂の石碑などに由緒、願主などを記している。要石の先端を橋外に持ち出し、ここから石製高欄の親柱を支える技法は珍しい。建造は安政初年頃。

序碑・石燈籠は建設年代のほぼ確実な基準資料であり、歴史的景観の重要な要素でもある。



## 線彫板碑

■史跡 ■指定日：昭和28年4月20日 ■所在地：夷 ■年代：南北朝～室町時代

2 か所に分かれ、それぞれ地名から道園板碑、梅の木板碑とも呼ばれる。総計 71 基。通称道園板碑は巨石の周囲に線刻されている。墨書の跡がわずかに見えるが判読不能である。巨石上部には月輪内に梵字を彫る。

巨石の奥に人骨片があったといわれ、巨石と並んで熊野権現を祀ることなどから中世の山中他界思想をうかがわせる遺跡。梅の木板碑は、地蔵堂と称される磨崖地蔵像の左右岩壁に線刻する。南北朝時代か室町時代初期の作。



## 夷谷

■名勝 ■指定日：昭和32年3月26日 ■所在地：夷 ■年代：

夷谷は、国東半島の西北部を貫流する竹田川の上流にある耶馬溪式地形の通称「中山仙峡」を中心に東夷、西夷地区に分布する。この溪谷は、耶馬溪層の角閃石凝灰岩が差別浸食を受けて生じた風景地で、マツ、カシなどにカエデ、ハゼなどの広葉樹を混交する樹林の中に高さ 10m から 50m に及ぶ岩塔、石柱、岩壁などが林立し奇景をみせ、独特の景勝地を形成している。最近、中山峡観賞のため峰廻り歩道が整備された。



## 長崎鼻の海蝕洞穴

■天然記念物 ■指定日：昭和38年2月15日 ■所在地：見目 ■年代：平安時代後期

周防灘に突き出た長崎鼻はリアス式海岸の半島であるが、そこには多数の海蝕洞穴が発達している。これは第四紀前半に堆積した凝灰角礫岩（火山灰と火山礫からなる岩石）がはげしい波浪によって、その軟質な火山灰の部分から浸食されて洞穴になったものである。約 400m の間に大小さまざまな形の洞穴や洞間があるが、現在でも海水による浸食作用が進行している洞穴もあり 今後洞穴が大きくなったり、新たに生じたりする可能性が強い。

